8 月 13 日のメッセージ

聖書：テサロニケ信徒への手紙一　1：　1 – 10

「主に倣う」

「人の子よ、イスラエルの土地について伝えられている、『日々は長引くが、幻はすべて消えうせる』というこのことわざは、お前たちにとって一体何か。」(エゼキエル書 12:22)

このことわざは、現代の私たちの気持ちを代弁しています。「平和はいつ実現するのか」、「安全で安心な日々は幻想に過ぎないのか」。ロシアによるウクライナ侵略が始まって 1 年以上が経ちますが、この間、平和への願いも空しく、日々戦闘は続けられています。被災し、涙に暮れる人の数はますます増えています。「永遠に終わらないのではないか。」そんな思いさえ頭をよぎります。

しかし、神は「決して諦めるな」と叱咤されるのです(「それゆえ、彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。『わたしはこのことわざをやめさせる。彼らは再びイスラエルで、このことわざを用いることはない』と。かえって彼らにこう語りなさい。『その日は近く、幻はすべて実現する。』」エゼキエル書 12:23)。神は必ず平和を実現されるからです(「わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。」詩編 121:2、「わたしが告げるすべての言葉は、もはや引き延ばされず、実現される、と主なる神は言われる。」エゼキエル書 12:28)。

あなたたちは聖書を通して、歴史を通してその事実を知っているはずではないか。だから、その日に備えて祈り続けるようにと勧められるのです(「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」ルカによる福音書 12: 37)。ただし、その日がいつ来るのかはわかりません(「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」ルカによる福音書 12:40)。結果、エゼキエルの時代のように、また人は諦めそうになります。この繰り返しの中で、人は生きてきました。

それでも、先達たちが諦めなかったのはなぜでしょうか。それは、救いの実現をすでに知っている者としての矜持を持っていたからに他なりません。

「ノーブレス・オブリージュ」という言葉があります。「高い地位や身分に伴う義務。ヨーロッパ社会で，貴族など高い身分の者にはそれに相応した重い責任・義務があるとする考え方」(大辞林)。それは、「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」(ルカによる福音書 12:48)ということでしょう。キリスト者としての義務とは、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」(ルカによる福音書 12:27)以外にはありません。だから、他の誰もが諦めそうになる中で、「神は必ず来られる」、「神の救いの約束は確実だ」と信じて、彼らは先頭を走り続けたのです。

「あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。」(テサロニケの信徒への手紙一 1:6-7)

テサロニケの人々ばかりでなく、私たちを取り巻く状況もまた確かに厳しい。それでも、神は私たちに「声を上げ続けるように」と期待しておられます。

先週、8 月 6 日、広島で催された平和記念式典で湯﨑英彦広島県知事ははっきりと、「核抑止論者に問いたい。あなたは責任を負えるのか」と問われました。広島、長崎の原爆の悲劇から 78 年。未だ核兵器廃絶は実現されていません。何度も諦めそうになる場面もあったでしょう。それでも、痛みを知る者、痛みを受け継ぐ者として、広島、長崎の人々は声を上げ続けておられます。

イエスも同じです。何度、否定されても、何度、拒絶されても、真の救いを、真の平和を宣べ伝え続けられました。

私たちも「主に倣う」一人として、その後に続きたいと願います。そして、平和の実現に向けて今日も、祈り、声を上げ続けるのです。